



# エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No.1 April 1, 2017

<http://www.ses-japan.org/>

—目次—

巻頭言「エコクリティシズム研究学会第30回記念の年に寄せて」	1
「韓国の学会との交流」	3
エッセイ「アメリカの大学でのクラブ活動」	4
エッセイ「アコマの風」	4
News & Information	6

巻頭言

## エコクリティシズム研究学会第30回記念の年に寄せて

伊藤詔子(エコクリティシズム研究学会代表)

今年の大会は30回目となり、学会誌、『エコクリティシズム・レビュー』No.10は、学会誌の形になってから10年目、研究会時代の報告誌、『エコクリティシズム研究会報告』1～4も加えると15年目、研究会が始まった1996年から数えると22年目になる。どんなものにも歴史があり、研究会出発時には事あるごとに集まり作品や研究書を読む会であったが、現在のような年1回の大会の形をとり始めたのも『エコクリティシズム・レビュー』の刊行と歩を一にする。10号ともなると、よちよち歩きの子供がついに10歳に達したという密かな感慨もある。個人作家学会と違って多領域から会員が集まり、論文、シンポジウム特集、ワークショップの報告論文や学会報告、また講演後の特別寄稿という形で誌面を構成してきた。協力を惜しまれなかった内外の先生方の顔も思い浮かび、10号に論文を寄せてくださるスコット・スロヴィック先生は2回目のご執筆となる。

去年2016年8月6日に、かねてより計画してきたMESA(多民族研究学会)との東京での合同年次大会が成功裏に実現した。イギリスロマン派のエコロジー研究グループ「トランスアトランティック・エコロジー」の科研とも共催で、多忙なスロヴィック先生の来日を企画実現し、最新のエコクリティシズムの講演二つに触れることができたし、先生には大会に早朝より直接ご参加いただき貴重なコメントを頂いた。3つの団体の人的文化的資産を融合させるところに意義があり、やはりエスニック研究とエコクリティシズムはかなり交錯があり響きあい、シンポジウムが発展形で実りを結ぶように、今後とも協力していきたいと願っている。会最後の両学会の重鎮と若手の隠れたタレントによる武術の披露は、最適の会場の演出もあり、鬼気迫る迫力のエネルギーが流れ、エコクリティシズムの波を超える新たな波の到来も連想させた。合同大会についての詳細はニュースレターの報告に譲りたい。

会を支えているのは、会員と共に少なくともここ 10 年継続して絶え間ない仕事をこなしてきた事務局や、メーリングリストとホームページ委員の貢献、事務局便りと、今年から出発する「エコクリティシズム・ニューズレター」編集委員の努力等である。そしてエコクリティシズムという批評領域に引き寄せられて集うこの学会の活動は、やはり学会誌に集約されているのを感じる。内向きの話になるのを恐れつつ明かすと、私たちの編集委員会は、印刷完全版下作成という厳しい任務を担ってきた。編集委員は 2 年おきに半舷上陸で交代し、これまでおよそ 20 人の会員が委員会に参加し、ノウハウを伝承し編集の苦楽を共にしてきた。「寄らば大樹の陰」とは真逆の「全員野球の精神」で文字通りつくりあげ、その結果、多くの方が論文の書き方そのものを編集委員会で習得してきた。そのかいあってか、学会で企画する共著、共訳書出版も今回 27 人参加の、『エコクリティシズムの波を超えて — 人新世の地球に生きる』(音羽書房鶴見書店刊)で 6 冊目となる。ともに慶びたい。

実はこうした学会少史は、客観的に見るとエコクリティシズムという批評の歴史に伴走するものである。この 20 数年エコクリティシズムは、文学研究そのものの脱領域化、ネイチャーライティングと環境文学のジャンル認識と研究方法論の制度化の努力と複雑化、他の批評理論や学問領域との融合・応用とともに、懸念の深まる世界情勢と地球環境の悪化とともに批評対象も拡大の一途を辿ってきた。多様性そのものの領域であるが、誰もがあげるこの批評の明確な出発点は、ウィリアム・リュカート(William Rueckert)が『アイオワ・レビュー』(*The Iowa Review*, 1978)誌上「エコクリティシズムの実験」(“experiment in ecocriticism”)で初めて ecocriticism が使われた 1978 年にあるだろう。しかしスロヴィツクの最近作、共著序章として収録される「第 4 の波のかなた——エコクリティシズムの新たな歴史編纂的比喩を求めて」によると、以下のようその淵源を氏は、古代にまでさかのぼって考察している。

「この仕事をして 30 年以上を経ても、なお私はエコクリティシズムの原ウアテキスト、すなわち絶対的源泉をピンポイントで指し示すことができない。しかし死海文書またはウパニシャッドに関する古代釈義は、もしこれらの文書の中の自然に関するモチーフに言及することにもなれば、ヒキガエルや小石の営みに、そしてまた人体に発見される産業廃棄物の痕跡に具現化される物語や、南アフリカでのフラヌールの都会体験談の文章表現、そして表面上は詩でもなければ非・人間的環境に波長を合わせているというのでもない言葉から成る環境詩学、といった 21 世紀の論考の数々の、先駆けと見なされるものがあるであろうという実感を持っている。」(同書序章書き出し)

地球の歴史を貫通するこうした発想こそ、エコクリティシズムの特性なのであろう。教条的に説明するのは難しいが、エコクリティシズムとは、人間よりも古い存在である「ヒキガエルや小石」を、「人体に発見される産業廃棄物の痕跡」と時空をこえて結合する地球的想像力の飛躍と結縁している。詳しくは近刊共著『エコクリティシズムの波を超えて』の序章および、多様な 26 の諸論文を見ていただきたい。そこに内包されているジャンルや作家やテーマ、又記述スタイルの多様性をみると、グローバルであらざるを得ない世界の文学や核文学や核批評など、環境の今日的課題ともいべき独自の領域が、SES-J の活動視野に大きく入ってくることは確かであろう。おそらく世界全体、とりわけその物理的ありようを見渡し感じることと、それぞれが継続的に取り組んでいる作家やテーマを定点とし掘り下げていくことの絶えざる往復運動が、エコクリティシズムには求められており、そうした動きの反映が、第 30 回エコクリティシズム研究学会のプログラムにもうかがえる。

年頭にあたり、今年はこの学会の活動が、何らかのヒントを参加者にもたらし、会員が文学批評の観客ではなく、主体的にふるまいエコクリティシズムの歴史の中に入っていくことを促す、有効な場となることを希ってやまない。

## 韓国の学会との交流

浅井千晶(エコクリティシズム研究学会副代表)

2016年6月18日(土)、私の本務校である千里金蘭大学で韓国 EAC (English and American Cultural Studies)学会 (<http://eac2001.org/>)との国際交流セミナーを開催した。韓国からの参加者が7名、日本からは本学会の加藤ダニエラ先生、種子田香先生、そして私の3名が参加し、各人が興味のある作品・ジャンルについて発表し、議論をした。



この交流セミナーはこの時が初めてで、2月に韓南大学の Kim Ilgu 先生から EAC 学会の会長になったのを機に学会の国際的な活動を広げたい、今年には日本の研究者と日本で1回、韓国で1回、セミナーを持ちたいと提案されたのが端緒であった。Kim 先生とは2007年の日韓 ASLE 大会で知り合ったのだが、交流が深まったのは2014年に韓南大学で開催された東/西 SF 国際会議に招待され、中山悟視先生と一緒に参加してからである。ちょうど前年夏にパオロ・バチガルピの講演会に参加して、私の SF への関心が高まっていた時期であった。

6月のセミナーではネイティブ・アメリカンやアフリカン・アメリカンなどアメリカ文学・文化に関する発表が多く、ダニエラ先生の翻訳をめぐる発表は夏の SES-J / MESA 合同大会につながるものだったが、何よりよかったのは少人数で十分な時間を議論に費やすことができたことだろう。また、伊藤代表に相談して会員メールで参加者を募った時、すぐに反応があり、本学会員の研究への情熱と積極性を再確認する機会にもなった。12月13~15日には韓南大のある大田で開催された韓国英文学会(ELLAK)にEAC学会の招待で、池末陽子先生、種子田先生、浅井の3人が参加した。



昨年の実績をもとに今年には韓国の出版社から共著を出そうということになり、今多彩なアプローチが可能で英語が比較的読みやすいことから児童文学の権威あるニューベリー賞作品を取り上げて論じるプロジェクト「Reading Newbery Award Books」が進行中である。今度は澤田由紀子先生も参加し、日程と詳細は未定であるけれど、6月下旬には千里金蘭大学で今年も会議をもつ予定である。



## アメリカの大学でのクラブ活動

原田和恵(マイアミ大学)

オハイオ州の南西部にあるマイアミ大学で日本文化と言語クラブ (Japanese Culture and Language Club, JCLC) という学生サークルのアドバイザーをしています。このサークルの目的はキャンパスや地元のコミュニティで日本文化の理解を深めるというものです。学生が自主的に活動するクラブなので、メンバーのリーダーシップ性や責任感の醸成にも役立っているクラブだと思っています。主な活動は、伝統的な日本文化に関するものからアニメやマンガなどのポップカルチャーまで、自分たちでクイズやゲームを作ったり、陶器づくりや月見会、日本食のレストランに行ったりするなど様々なイベントの開催です。



年に2回ほど、寿司づくりパーティーや新年会などの大きなイベントをキャンパスで開催しており、例年2月にあるこの新年会では、地元の人々やシンシナティ大学の日本クラブの学生なども招待する盛大なイベントを開催しています。お茶会や日本舞踊、コーラスなどのパフォーマンスのアレンジから、クイズ大会、けん玉などの伝統的なおもちゃで遊ぶワークショップなどのコーナーの設置、食事の手配など、クラブの部長をはじめメンバーたちはいろんな準備を行なっています。今年から地元の太鼓クラブのパフォーマンスも加わる予定で、さらに賑やかなものになるでしょう。アドバイザーの私は、ほとんど準備に関わることはありませんが、予算の承認と問題が起こった時に対処することが仕事です。今までやったのは、大学の会計との連絡、レストランへ行くのに人数の調整がうまく行かず、車が足りなくなった時に手伝わたりです。万が一イベントが失敗しても経験として、これからの学生たちの将来につながればいいなと思っています。最近の日本の就職活動事情はよくわかりませんが、アメリカの就活では、どんな仕事でもリーダーシップ性が非常に重要になってくるので、サークル活動を通して異文化理解だけではなく、様々なスキルが身につけてくれることを願っています。



## アコマの風

黒住 奏 (日本学術振興会特別研究員)

2015年11月、広島で開催された世界核被害者フォーラムで、ウラン鉱山で働いていたアメリカ先住民の方が報告されるということで、その日に入っていた通訳の仕事に急遽友人に代わってもらい、フォーラムに出かけて行った。彼の名前は、ペトゥーチ・ギルバート。アコマ・プエブロの環境活動家だ。ウラン鉱山での労働のことや、プエブロ周辺の土地や水質汚染の現状を聞きながら、アコマ・プエブロの詩人サイモン・J・オーティーズになんだか似ている



なあと思っていた。ランチタイムに、フォーラムの通訳をしていた友人が、ペトーチさんを紹介してくれた。話をしていると、「僕の兄は有名なアコマの詩人だよ」と彼が言った。ペトーチさんはなんとサイモン・J・オーティーズの弟だったのだ。2月に学会発表のため、ニューメキシコ州アルバカーキに行くことが決まっていたので、それを彼に伝え、是非アコマを訪ねておいでと、連絡先をくれた。2016年2月、学会発表を無事終え、モートルをチェックアウトし車を借りた。まだまだ冬の寒さが残る標高約1600mの町アルバカーキから、かつてのルート66であるI-40を西に向かって約1時間。ペトーチさんとの待ち合わせ場所である、アコマ・スカイシティ・カジノを目指した。カジノのカフェでしばらく待っていると、ペトーチさんがニコニコと現れた。一緒にランチをとってしばらくおしゃべりした後、ペトーチさんがアコマの土地を案内してくれた。

アコマの土地に「はじめまして」と挨拶をしまわりながら、ペトーチさんがたくさんの物語を聞かせてくれた。アコマの起源、目の前に広がる景色にまつわる神話、アコマの歴史、土と水と植物の話。アコマの大地はしんとしているが、耳を澄ますとその土地の音が聞こえてくる。風の音とペトーチさんの声が混ざり合っ、なんだか歌を聴いているようだ。天空都市と呼ばれる、メサの上にある集落アコマ・スカイシティへ歩いて向かう。メサの上に続く舗装されている道路ではなく、岩肌の手掘りで作られた道を登っていくと、アドビレンガで作られた小さな家が並ぶ集落が目の前に現れた。ペトーチさんが、英語とケレス語を混ぜながら知り合いと話をするのに耳を傾けてみるが、当たり前だが英語の部分しかわからない。「アコマはあのマウントテイラーに守られているんだよ。」そう言って、遠くに見える雪を頂いた大きな山を指差した。しばらく無言でマウントテイラーを見つめる彼の眼差しには、神聖な山への愛情と尊敬の念が溢れていた。そして父親が建てたという家を指差しながら、ご家族の話や幼少時代の話をしてくれた。外の竈をみながら「よくこのかまどに隠れていた。寒いから髪を洗うのがいやだね。」いなくなったペトーチを探しに村中の大人たち総出動。結局、その竈の中で眠りこけているところを発見されたそうだ。「こっぴどく怒られたよ。」と、ケラケラ笑いながら子供時代の思い出話をする彼の表情に5歳の少年の面影を感じた。日が暮れてきたので、そろそろおいとましようとしたら、「サイモンには会いに行かないのかい？」と、彼が言った。「突然のことだし、面識もないし失礼じゃないだろうか」と言うと、「連絡をしておくし、そんなの気にしなくても大丈夫だよ。」と言ってくれた。ふむ。アリゾナに行くことは考えていなかったな。いや、でも、ペトーチさんと広島で出会えたこの奇跡的なご縁が、また次の場所へ導いてくれているということだろう。うん。行こう。ペトーチさんとアコマの土地にお礼を言って、またここに戻って来られますように、と心の中で願い、その夜はアルバカーキに戻った。数日後、チャコキャニオンを訪ねた後ギャラップに一泊し、一路アリゾナ州テンピを目指した。目の前に広がる景色が、ジュニパーからサボテンに変わってきた。テンピまであと少しだ。懐かしい町テンピ。10年以上前に一年ほど住み、NYに住んでいる間も、休みの度に立ち寄っていたが、再びここを訪れるのは4年ぶりだろうか。アリゾナ州立大学の周辺は、新しいビルディングが建ち、小洒落たお店が増え、びっくりするほど変わっていた。見慣れた風景が変わるのは、いつもなんだか寂しい気持ちになる。



空に届きそうなほど背の高いヤシの木が並ぶ道を通り、イングリッシュデパートメントに向かった。ドアをノックすると「カムイン」と声がした。詩人サイモン・J・オーティーズは、ゆっくりと椅子から立ち上がり、大きな手を差し出して、急な訪問にも関わらず私を歓迎してくれた。耳にはホピのシルバーピアスが揺れていた。様々な話を聞き、他愛のない話もたくさんして、楽しい時間はあっという間に過ぎた。帰り際に「明日、モニュメントバレーに寄ってからアルバカーキに戻って、そして日本に帰ります。」と言うと、彼は「モニュメントバレーか。よろしく伝えてね。彼らは私を知っているから。」と言って笑顔で見送ってくれた。



2日後、アルバカーキに戻るためI-40を東に向かって走っていると、マウントテイラーが見えてきた。プエブロの人々をずっと守ってきたマウントテイラー。プエブロの慈しんできたマウントテイラー。彼らの眼差しや言葉から滲み出てきた土地への想い、それが直接体にじんわりと入り込んできて、心がいっぱいになる。車を走らせながら、この旅で2人に出会えたこと、アコマの土地に出会えたことへの感謝の気持ちが溢れ出てきてどうしようもなくなった

ので、私の「ありがとう」を、どうかもう一度、彼らに運んでくれるよう、マウントテイラーが見えなくなるまで風にお願いをし続けた。

この旅以来、サイモン・J・オーティーズの本を開くと、アコマの雄大な大地とターコイズ色の空が目の前に浮かぶ。そして、彼らの歌うような声が静かに聞こえてくる。また彼らに会いに行こう。



## News & Information

### ◆◆大会報告◆◆

#### SES-J/MESA 合同大会報告

藤江啓子(エコクリティシズム研究学会副代表)

2016年8月6日(土)東京の大東文化会館でSES-J / MESA 合同大会が開催された。前半は横田由里氏、後半は藤江の総合司会で進行した。前半はSES-J 代表伊藤詔子氏の開会の辞と中垣垣太郎氏の会場挨拶に始まり、夏目康子氏「アイリッシュ・アメリカンの歌におけるHeavenの表象」(司会:西原克政氏)、デビッド・ファーネル氏“Environment, Utopia, and Dystopia in Le Guin’s *The Dispossessed*” (司会:中山悟視氏)、清水菜穂氏「黒い「地下」の欲望——アフリカン・アメリカン文学の創造的エネルギー」(司会:峰真依子氏)、カトウ・ダニエラ氏“Environmental Imaginaries in Motion: Towards an Ecocritical Approach to Translation” (司会:塩田弘氏)の4つの研究発表があった。

後半はシンポジウム「クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム」が西垣内磨留美氏(MESA 会長)の司会のもとで行われた。講師は平尾吉直、松永京子、一谷智子、梶原克教各氏で、コメンテーターは長岡慎吾氏であった。次に、Scott Slovic 氏の特別講演、“Ecocriticism and the Psychology of Information Processing: Taking a Seat at the Table” があった。司会は伊藤詔子氏、コメンテーターは、牧野理英氏、マイケル・ゴーマン両氏であった。



西垣内磨留美会長の閉会の辞の後、浅井千晶氏の案内のもと、岸本寿雄氏と真野剛両氏による武術の披露があった。中華料理店での懇親会で大会は成功裏に閉じた。

◆◆大会情報◆◆

2017年 SES-J 大会日時と内容の決定

日時： 2017年8月5日(土) 9時25分～17時

場所： サテライトキャンパスひろしま(広島県民文化センター5・6階)

〒730-0051 広島市中区大手町1丁目5-3 ※そごうから5分 確定は5月で変更の可能性もありますが、その場合も広島市内です。

\* プログラムとレジメは7月上旬発送予定、懇親会の出欠については6月末にご案内します。

9:25 開会の辞

9:30～10:40 研究発表

研究発表1: 9:30～10:05

谷岡知美「アレン・ギンズバーグとボブ・ディラン — アメリカ1970年代の風景」(司会: 塩田弘)

研究発表2: 10:05～10:40

平瀬洋子「『グレート・ギャツビー』におけるエコクリティシズム

— ギャツビーとgreenの関係について」(司会: 浅井千晶)

10:40～10:50 10分休憩

10:50～12:20

ワークショップ「*Material Ecocriticism*(Indiana UP, 2014)を中心とするマテリアル・エコクリティシズムの動向について」(藤江啓子、伊藤詔子、芳賀浩一)

12:20～13:00 昼食

13:00～15:00

シンポジウム 核と環境と文学(1)「核とポストモダン文学」(松岡信哉、川村亜樹、三重野佳子、デビッド・ファーネル)

15:00～15:10 10分休憩

15:10～16:10 特別講演 渡邊克昭先生【日本アメリカ文学会関西支部長、大阪大学教授】

16:20～17:00 総会

17:00 閉会の辞

17:30～19:30 懇親会 (幹事: 谷岡知美)

会場 広島ダイヤモンドホテル(広島市西区観音新町2-4-6) <http://www.h-diamond-hotel.com/>

\*8月6日(日) 広島平和記念公園の訪問をツアーで行うことを検討しています。

~~~~~

◆◆各種委員会からのご報告&お願い◆◆

☆国際広報委員より☆

会員の出版(単著・共著)・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストとHPでお知らせしますので、塩田弘宛て(shiotah@shudo-u.ac.jp)にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページ上に掲載する以下の記事を常時受け付けています。皆様のご協力で内容を充実していきたいと思っておりますので、よろしくご依頼申し上げます。宛先: 三重野佳子mi eno@nm.beppu-u.ac.jp

- (1) 「旅する会員」ページ：皆様の旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒にお願いします。ページに載せる形に大体整えてワードファイルあるいはPDF ファイルでお送りください。
- (2) 「エコクリティシズムテーマの概要」で、現在のテーマの他にもご提案がありましたらお願いします。出版計画委員会で掲載を検討します。
- (3) 国際広報委員に寄せられた会員の皆様の出版情報を News ページで研究情報として掲載します。

☆事務局より☆

●新入会員のご紹介

2015年8月からの2016年2月までの新入会員のご所属とご専門をご紹介します。

池末陽子氏（大谷大学、19世紀アメリカ文学・文化、エドガー・アラン・ポー）

●会費納入のお願い

年会費4000円（学生会員3000円、シニア会員2000円）のご納入を、2017年6月末日までをお願いします。4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2000円になりますので、希望者は、事務局の平瀬洋子（danbara@mpd.biglobe.ne.jp）まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしく願いいたします。

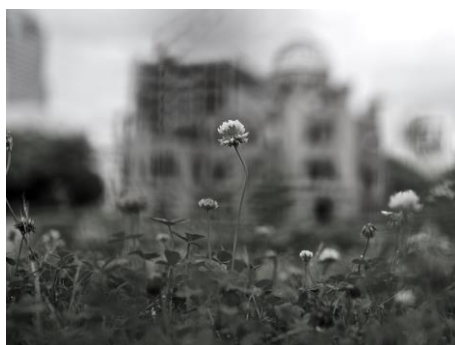
振込先： ゆうちょ銀行 加入者名 エコクリティシズム研究学会 口座番号 01380 - 4 - 96525

●住所、ご所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、住所やメールアドレス・所属等に変更があった方は、平瀬洋子宛て（danbara@mpd.biglobe.ne.jp）に必ずご連絡下さい。

~~~~~

**編集後記**



ニュースレターNo.1をお届けいたします。記念すべき初号であり、心を込めて編集いたしました。広島を原点とするエコクリティシズム研究学会ならではのニュースレターに仕上がったと自負しております。お忙しい中、国内外からのご投稿、ご寄稿ありがとうございました。このニュースレターを会員のみならず、コミュニケーションの場として自由に活用され、学会を盛り上げていただければと思います。ご投稿をお待ちしております。(H.K)

黒住奏撮影 “after rain, before summer”

~~~~~

2017年4月1日 エコクリティシズム研究学会事務局発行 エコクリティシズム研究学会 代表 伊藤 詔子  
 事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室 mizuno@sanyo.ac.jp  
 〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1 広島国際学院大学 平瀬洋子研究室 danbara@mpd.biglobe.ne.jp  
 (補佐) 〒690-8518 島根県松江市西生馬町14-4 松江工業高等専門学校 岸野(早水) 英美研究室 khidemi4@hotmail.com